2023 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告

金田忠裕[*1]，早川潔[*2]，鯵坂誠之[*3]，稗田吉成[*4]

A Report on the Workshop of Academic Portfolio in 2023

Tadahiro KANEDA[*1], Kiyoshi HAYAKAWA[*2], Shigeyuki AJISAKA[*3]and Yoshimasa HIEDA[*4]

要旨

大阪公立大学高専は，2012 年 3 月に全国の高等教育機関で初めて学内・対面でアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した．その後，毎年 2～3 回のワークショップを対面で開催し，教育改善に取り組んできたが，2020 年から始まった新型コロナの流行により，対面でのワークショップ開催は断念し，2021 年度にオンライン型のワークショップを 2 回，2022 年度も 2 回開催することができた．2023 年 5 月に新型コロナが 5 類に移行したことに伴い，2023 年度 9 月には対面で，12 月には対面とオンラインのハイブリットで開催した．本稿では，2023 年度に開催したアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップの概要について説明した後，ワークショップ参加者の感想をメンティー，メンターの立場から述べる．また公募書類の側面からアカデミック・ポートフォリオの役割を再確認する．

キーワード: アカデミック・ポートフォリオ，教育改善，統合，メンティー，メンター，ワークショップ

１．はじめに

アカデミック・ポートフォリオ（以下 AP）とは，「教育，研究，サービス活動（社会貢献・管理運営等）の業績についての自己省察による記述部分およびその記述を裏付ける根拠資料の集合体であり，教員の最も重要な成果に関する情報をまとめた記録」である[1]．

AP の最大の特徴は，教育・研究・サービス活動，互いの連携・寄与について考察する「統合」の章にある．また，これまでの成果から最も自分が誇りに思うものを 3 つ挙げて記すことも AP の大きな特徴である（これは，教育 1 つ，研究 1 つ，サービス活動 1 つと決まっているわけではなく，教育を重要視する教員ならば教育から 3 つ選ぶ等，教員の活動スタイルにあわせることができる）．

さらに，将来達成したい目標を 3 つ記す点も「業績リスト」と大きく異なる点である．これらを十分な自己省察を行いながら記述していく．AP は一人で作成し完成させることも可能だが，ワークショップ（以下 WS）に参加し，メンター（AP 作成経験のある教員）の助言とサポートを得ながら一気に書き上げることで完成度も質も高めることができる．WS では複数回の個人メンタリングがスケジュールの中に組み込まれている．それ以外の時間は基本的に自らの活動を省みつつ行う個人作業が中心であり，適宜作成途中の AP をメンターに提出し，メンタリングを受ける．そこでの助言をもとに改訂を重ね，最終的に AP を完成させる．詳しくは，ピーター・セルディンらの書籍を参考にされたい[1]．

2012 年 3 月，大阪公立大学高専（当時は大阪府立大学高専，以下本校）は，全国の高等教育機関で初めて単一教育機関内 AP 作成 WS を開催した[2]．その後も FD 活動として，継続的に AP に取り組んでいる．また，それに先駆けて 2008 年度から，教育に特化したティーチング・ポートフォリオ（TP），2012 年度からは，事務職員のスタッフ・ポートフォリオ（SP）に取り組んでいる．

本校は 2019 年度まで TP/AP/SP 作成 WS を，年 2 回夏と冬に対面で開催してきたが，2020 年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止対応のため，夏は中止となり，冬はオンラインで TP 作成 WS のみ開催した[3]．2021 年度より TP 作成 WS に加え，AP 作成 WS をオンラインで 9 月と 12 月の 2 回開催している[4][5]．2023 年 5 月 8 日以降に新型コロナウイルスの 5 類感染症移行に伴い，2023 年度の

2024 年 9 月 1 日 受理

*1 総合工学システム学科 エレクトロニクスコース
(Dept. of Technological Systems : Electronics Course)
*2 知能情報コース（Intelligent Informatics Course）
*3 プロダクトデザインコース（Product Design Course）
*4 一般科目系（General Education）

AP 作成 WS は 9 月には対面で，12 月には対面とオンラインのハイブリットで開催した．

本稿では，2023 年度に実施した AP 作成 WS の概要について説明し，参加したメンティーと担当したメンターの感想を述べる．また，近年作成した AP を公募書類として提出される方が増えてきていることから，再度この観点から検討を加えたい．

２．ワークショップの概要

表１に開催した WS の主なスケジュールを示す．なお，このスケジュールは 9 月，12 月ともに共通である．また，AP 作成 WS と同時に，TP 作成 WS を同日程で開催した．第 3 日午後の「AP プレゼンテーション」では，作成した AP の理念や教育方法等を A4 サイズ 1 枚のレジュメにまとめて発表することを修了証授与の要件とした．その際，教育，研究，サービス活動の互いの連携・寄与が良くわかるように，教育・研究・サービス活動，それぞれを表す 3 つの円を重ねた「AP チャート（三相図）」および目標をレジュメの中に記してもらった．

表２に開催した WS の参加者数を記す．なお第 22 回のメンティー1 名は大学院生版 AP（GSAP：Graduate Student Academic Portfolio）[6]の参加者である．

また第 23 回のメンティー1 名は SAP（Structured Academic Portfolio：構造化アカデミック・ポートフォリオ）[7]の参加者であり，オンライン参加者である．

表１　開催した WS の主なスケジュール

	第１日	第２日	第３日
午前	オリエンテーション AP チャート作成	個人メンタリング(3) AP 作成作業	個人メンタリング(5) AP 作成作業
午後	個人メンタリング(1) AP 作成作業 個人メンタリング(2)	中間発表 AP 作成作業 個人メンタリング(4)	AP 作成作業 プレゼン準備 AP プレゼンテーション 修了式
夜間	意見交換会 AP 作成作業	AP 作成作業	修了を祝う会

表２　開催した WS の参加者数

	メンティー	メンター	スーパーバイザー
第22回(9月)	4名(うち学外2名)	4名(うち学外1名)	1名(うち学外0名)
第23回(12月)	2名(うち学外2名)	2名(うち学外0名)	1名(うち学外0名)

３．アカデミック・ポートフォリオを執筆して

アカデミック・ポートフォリオを作成して（久野章仁）

私は 2008 年に大阪府立工業高等専門学校（当時）に着任し，2010 年にティーチング・ポートフォリオを作成した．その後 10 年以上の経験を経たので，振り返るには良いタイミングであると考え，また，これまでの活動をまとめ，私という人間の基となっている理念を省察することで，昇任人事のための資料として使用することも目的の一つとして，アカデミック・ポートフォリオを作成した．メンターは本校の稗田吉成先生にご担当いただいた．稗田先生は非常に丁寧にこちらの考えを聞いてくださり，私の考えの奥底にある根本的な理念を客観的立場から見るためのヒントを与えてくださったおかげで，TP からのブラッシュアップを行うことができた．TP を経験しているためか，私としては，AP 執筆作業は TP 執筆の時よりも順調に進んだように思われた．

私は，2010 年に TP を作成した時には，その年に初めて行われた長期遠隔コースに参加して，ティーチング・ポートフォリオを作成した．長期遠隔コースを選んだ理由は，あいている時間に自分のペースで進められそうな感じがしたからであった．今回は対面での短期集中コースだったので，前回の TP 執筆の経験とは随分と異なる執筆状況となった．もっとも，対面での短期集中コースで TP や AP を執筆している方がほとんどだと思われるので，ようやく本来の TP/AP 作成ワークショップに参加したという形であった．一方で，コロナ禍のため，2021 年度と 2022 年度はオンライン型のワークショップだったと聞いており，2023 年度は久しぶりに対面での TP/AP 作成ワークショップが開催できたという背景もあった．私としては，長期遠隔コースと通常の短期集中コースの双方を経験して，双方とも，それぞれのメリットがあると感じられた．大きな違いは，やはり対面方式では，共にポートフォリオ作成に励む仲間が近くにいるということであろう．もちろん，メンターの先生とのやり取りがメインとなるが，共に頑張る仲間がいることで執筆の集中力が増すように思われた．また，ワークショップの中でグループワークも一部，用いられていたおかげで，自分には無い視点から，多くの気付きがあった．

今回，特に苦労した点は，本校がカリキュラム変更の最中であり，これまで取り組んできた内容と，今後，取り組んでいく内容に変化があることであった．私は，現カリキュラム（H カリキュラム）では環境物質化学コースに属し，新カリキュラム（R カリキュラム）ではエネルギー機械コースに属しているため，これまでの教育・研究・サービス

活動をそのままブラッシュアップするだけではなく，新カリキュラムに合わせていく必要があった．そのような困難の中でも，私の活動を貫く理念のようなものが判ってきたことは大きな収穫であった．このような機会を与えて頂き，様々なサポートをして下さった皆様に深く感謝の気持ちを申し上げたい．

アカデミック・ポートフォリオを作成して（三苫好治）

このたび，私自身の研究活動をまとめ，これまでの活動がどのように教育に反映されたかを見つめ直す機会をいただきました．社会背景が激変している中で，今後どのように研究と教育を両立させていくべきかを考え直す時間でもありました．その過程で，一見不連続に見える内容を再整理し，紡ぐ作業は大変でしたが，メンターの助言を受けながら教育という視点で一つ一つ見直しました．その結果，「研究」というチャレンジは，学生にアントレプレナーシップを伝えることと同義であることを再確認できました．その精神に触れた学生は，いっそう社会に貢献できる人材に育つであろうと思います．また，これまでの研究に関する実例からは，目標に到達する手法の一つとして「PDCA サイクル」の徹底が重要であることも浮かび上がってきます．理念とその実現のための手法について，メンターのご指導により言語化し，他者に伝える力も向上させていただきました．今回の経験を通じて得た知識やスキルは，今後の研究および教育活動に大いに役立つと確信しています．

最後に，この取り組みを支えてくださったメンターやサポートしてくれた皆様に心から感謝申し上げます．皆様のご指導とご支援がなければ，この成果を達成することはできませんでした．

これまでの経験と考えから見える理想像（木村祐太）

私は，今回のアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを通じて，はじめてアカデミック・ポートフォリオについて知った．本ワークショップへの参加の経緯は，教員採用の公募にてアカデミック・ポートフォリオが必要になったことが理由である．

ワークショップを振り返ると，当初の目的は公募の必要書類の作成のためであった．しかし，アカデミック・ポートフォリオを実際に執筆して，自身が持つ経験や信念が可視化（もしくは文書化）され，自分の人生における理想像などがより明確になり，最終的には自分自身を整理することに重きを置いて執筆に取り組めたと感じた．自身の経験や考え，思いなどをより体系的に整理し，理想の教員像を明確化することは，アカデミック・ポートフォリオ作成の目的の一つであることは当然ながら，教育だけでなく，これまで自身が何を大切に，どんなことを目標として生きてきたのかなど，より広い観点で物事を振り返るきっかけになった．

私のメンターを担当してくださった本校の金田先生は，対話を通じて，私が持つ信念が過去のどのような経験から形成されたものなのか，さまざまな観点から私の考えを引き出してくださり，私の考えがより明確になった．自身の主観では繋げられなかった過去の出来事も，他者の角度からでは違った見方があり，より深く自分自身を理解することができたと感じた．一人で自分自身を振り返ることは重要だが，自分自身をより理解するには客観的な意見を得ることがより重要なのではないかと思う．

また，ワークショップでは，参加されていた他の先生方と交流し，各々が考える教育の理想など，さまざまな考えに触れる機会が得られた．異なる分野の先生方が多く参加されており，分野が異なれば掲げる理想も少し変わるのだということを理解した．くわえて，特に，私以外の先生方は教員として長らく活躍されてきた先生方ばかりであったため，教育の現場での経験を豊富に持っており，異なる視点の考え方を知る良い機会となった．

ワークショップへの参加は有意義なものであり，今後にも役立てられるものであったと感じた．これから教育の現場でさまざまな経験を積み，今回執筆したアカデミック・ポートフォリオで掲げた理想像と異なる理想が生まれる可能性は考えられるが，そのたびに自身を理解し，ポートフォリオのアップデートに取り組みたいと思う．

人と物質の個性を見出し，育む（河底秀幸）

これまで，教育と研究のビジョンを明確にしたいという思いがあり，アカデミック・ポートフォリオの執筆にはとても興味があった．日常業務との兼ね合いもあって，ワークショップに参加することが難しかった．東北大学の助教の仕事が 8 年目に突入していて，自身のプロモーションの公募の不採用が続いていた状況もあり，このままでは駄目だと感じ，今回，ワークショップに参加して，アカデミック・ポートフォリオを執筆することにした．

3 日間のワークショップに参加し，アカデミック・ポートフォリオの執筆にひたすら時間を費やすことで，第一に執筆のためにまとまった時間を確保することの重要性を強く感じた．3 日間，たとえ教科書的な作成マニュアルを持っていたとしても，日常業務の中では，まとまった時間を確保するのは難しく，アカデミック・ポートフォリオを執筆するのは不可能であると思う．

執筆の過程では，現在に至るまでの自分自身の取り組

みなどを整理できて，とても有意義であった．さらに文章化することで，俯瞰的に捉えることができた点も良かった．これまで色々な先生方にお世話になり，その時々で色々な指導や助言をいただいていたことに気が付くことができた．そうした指導や助言によって，自分の教育感や研究感が育まれてきたことを実感できた．研究などの専門的な部分については，化学という学問の本質が，物質の個性を明らかにする点にあるという視点から，これまでの成果などを包括的に捉えることができた．教育については，自分自身の中で，人の個性を大切にしたいということに気が付くことができた．同時に，研究と教育について，個性というキーワードで関連付けることができた．そして，自分自身の教育と研究におけるビジョンとしては，「人と物質の個性を見出し，育む」ということを見出すことができた．

今回，教育と研究のビジョンを明確にしたいというモチベーションで，アカデミック・ポートフォリオの執筆に臨んだ．ワークショップで十分な時間を取ることができ，自分自身を振り返り，今後したいことを考える上で，個性というキーワードに気が付くことができたことはとても大きな収穫であった．5 年，10 年と月日が経って，環境なども変わると，今回得た価値観が変わっていく可能性もあるのではないかと思う．何かの節目に，ワークショップに再度参加して，アカデミック・ポートフォリオを改稿したい．

AP 作成 WS に参加して（鬼頭秀行）

今回，昇任審査に向けて AP 作成 WS に参加しました．文章を書くのが苦手で，TP を作成したときも時間がかかりました．AP は TP に研究・サービス活動と，これらの関係の記述を加える必要があります．TP の部分は何とかなるとして，研究とサービス活動は書ける材料があまりなく，書けるかどうか不安でした．

まず TP の更新にとりかかりました．作成時と理念が変わっていましたが，とりあえず更新と凝縮を済ませました．しかし，続く研究・サービス活動を書いていくうちに，これらとの関係や一貫性を持たせるため，何度か書き直すことになりました．

研究・サービス活動については，案の定，あまり書けませんでした．それでもメンターの先生のアドバイスを参考に少しずつ増やしていき，これらを統合する段階に移りました．なかなか関係が見つからない中，自分の中心にある教育について考え直すことをしました．そうすると TP を作成したときには見えていなかった，教育に対する考えの根底に流れているものを見つけ，それによって，教育・研究・サービス活動を結びつけられることがわかり，作成作業のゴールが見えてきました．

あとはまとめるだけでしたが，今回も WS 期間中に AP を完成させることはできませんでした．けれども WS に参加したおかげで何とか完成させることができました．一人では絶対無理でした．WS は AP を完成させるために，よく考えて構成されていると思います．全然書けなくて苦しい思いをしましたが，最後のプレゼンテーションを無事に終えられたこと，修了を祝う会で普段話すことができない先生とお話ができたことは良い思い出です．

AP を書き上げてみて，やはり研究とサービス活動の部分が弱いと感じます．今後の目標にも書きましたが，この部分もしっかり取り組んでいきたいです．教育についても，このままでいいのだろうかと思うところがあります．改善の余地がありそうです．このように考えることができるのも AP を作成した（文章にした）からだと思います．WS を開催し，サポートしていただいた皆様に感謝いたします．

４．メンターを担当して

メンターとしての至福（鰺坂誠之）

AP のポイントは教育・研究・サービス（校務分掌や社会貢献等）といった各活動との関係性や，その中心にある核（コア）に迫るプロセスにある．一見すると，各々の取り組みが別々の活動のように見えていたものが，WS を通じて相互の関係性を振り返ってみたときに「実はこんなところで繋がっていたのか！」と気づくとき．さらには，教育・研究・サービスの各々の取り組みをメンティー自身が「実はこんな理由でやっていたのかもしれない！」と気づいたとき．そのプロセスに立ち会うときが，AP のメンターとしての伴走冥利に尽きる瞬間といえる．

今回の AP 作成 WS では，比較的ベテランのメンティーであったため，教育経験も豊富で，研究業績も充実しており（むしろ凄すぎる！），校務分掌や社会貢献等のサービスに至っては私自身も今後の参考にさせていただきたくなる実例ばかりの内容であった．事前に提出されたスタートアップシートも，しっかり実施されていた．メンティーとメンターで行う個人メンタリングにおいては，スタートアップシートやミニワークの内容をベースにしつつも，対話しながら徐々にコアへ迫っていく「楽しさ」のようなものを感じることができた．メンティー自身はきっと産みの苦しみの中で，様々な葛藤もありつつ今回の AP を完成されたのだと思うが，メンターの私は期待通りの展開を経ることができて，とても有難かった．WS では最後にカバーページをもとに発表する場が設けられているが，そのときのカバーページもひと工夫されており「なる

ほど，そう来ましたか！」と思わされる意外性があった．とても充実したメンター時間を過ごさせていただいた．

久しぶりのAPメンター（早川潔）

APのメンターは9年ぶりである．さらに，コロナ期間は，TP・AP作成ワークショップへの参加を見合わせていたので，久しぶりの参加である．そのため，9年前の資料や直近のTPメンター資料を探して，メンター自体について，予習をして臨んだ．

今回のAPメンティーは医療系大学の先生でもあり，医師である．ただ，話をお聞きすると教育や大学運営にも積極的にかかわっている先生だとわかった．医療系大学の先生の多くは，診療および研究をメインで活動しており，教育や大学運営が比較的手薄になっている．今回のメンティーは，診療や研究もしながら，それと同じぐらい教育や大学運営に携わっている．

初日は，スーパーバイザーによる三相図の説明があり，それにしたがって，三相図を作成した．私自身，三相図は9年ぶりだったので，スーパーバイザーが説明してくれてとても助かった．

ガイダンスが終わり，個人メンタリングを行った．ここでは，メンティーのコアを引き出すために，メンティーの活動や思っていることを聞いた．メンティーの活動の幅が広く，初日のメンタリングでは，コアを引き出すことができなかった．私が話を脱線させるようなことをして，コアを引き出すことを遅らせてしまった可能性がある．メンタリング終わりに，私のAPとカバーページを渡して，コアを考えてもらった．

2日目の個人メンタリングでも，コアが出てこなかった．メンティーがいろいろな活動に参加しており，各活動の関連を探すことに多くの時間を割いてしまった．さらに，医療・研究・教育以外の活動が非常に多く，それらを整理することに時間がかかった．このように，活動が多岐にわたるメンティーの場合，関係性の薄い活動は入れないようにアドバイスしたほうがいいと思った．

3日目には，コアが出ていた．2日目の夜に考えてもらったので，3日目の個人メンタリング開始時にそのコアについて話を聞いた．それをもとにカバーページを作成した．メンティーの多くの活動が，コアの中心に非常にわかりやすくまとめられていた．たぶん，このようなページは，いろいろな活動をする中で作成されているので，このようなメンティーは，2日目までコアが出なくても心配しなくてよいと感じた．

今回のメンターも非常に有意義であった．3日間，私の個人的な活動が制約されるが，それ以上に実りが多い．今回のメンティーからも教育方法や評価方法を教えてもらった．特に，データ分析に関する話は，とても有意義だった．また，大学運営についても話してもらって，一部高専の運営にも関係するので，有意義だった．これからもメンター活動に参加したいと強く思った．

2度目のAPメンターを経験して（稗田吉成）

2023年夏のWSでは自身2度目となるAPのメンターをさせてもらいました。今回は同じ学校の教員がメンティーでしたが，これは初めてTPのメンターをさせてもらった2013年夏のWS以来のことでした。初めてメンターをしたときには知っている人であることで私自身が安心感を得ていたように思いますが，今回はお互いに知っていることがメンティーに対して悪影響を及ぼさないか気を付けなければならないという意識も出てきて，よい意味での緊張感になりました。

そのような緊張感を持ちながらでしたが，事前準備としてのスタートアップシートの読み込み，特にAPの場合は教育に関する部分(TP部分)を確認することもでき，さらにメンタリングを重ねることで，これまでに知っていたと思っていたメンティーについての情報がさらに増えていく中で，WS前にその人を知っているか知らないかはあまり気にしなくてもよい，つまり知っていることによる悪影響を意識しすぎる必要はないと思えてきました。それはメンタリングだけでなく，メンターミーティングで，スーパーバイザーや他のメンターと話をしていくことの作用もあったと思います。

ちなみにメンターミーティングでの会話はメンティーに対する気付きと自身のメンタリングの仕方についての反省をする機会でもあります。メンティーにもっと話をしてもらうことができたのではないか，掘り下げてコアを見つけてもらう言葉がけができたのではないか，等。ただしあくまでも伴走者であるのでメンターが考えていることに誘導するような言葉がけであってはならないということは意識しています。

さて，APを書くという作業は，教育・研究・サービスの関係性やそのコアとなる部分にメンティーが気付くことですが，今回のメンティーはメンタリングやAPの途中稿でもキーワードとその繋がりがもちろん出ていましたが，WSの最終発表の際のカバーページには，それまでには出てきていなかったことも明示されており，なるほどなぁと納得させてもらいました。毎回ですがメンティーにとってよいメンターであったかは定かではありませんが，このAPWSでの経験を通して，お互いがさらに前に進める力を得られたと信じています。

なおオンラインWSでの経験はありましたが，今回は対面でのWSに戻ったこともあり，改めて私は対面でのWS

の方がメンターをしやすいと感じた WS でもありました。

５．公募書類としての側面から

AP を公募書類として利用される方も増えていることから，この点について再検討をしてみたい．

通常，公募書類として，一次選考で書類審査，二次選考では，模擬授業があることが多い．公募書類には，履歴書・業績書・志望理由書・研究計画書のほか，業績の実物数点，大学によっては学位記のコピーも必要となる．

公募書類のうち，「(学部) 教育への抱負」の書類作成について考えてみる．教育への抱負を記載する場合に，教育経験がない状態あるいは浅い状態では，「どのように考え，どのような教育をして(行動を起こして)きたのか？」という点で具体性がない表現となることがある．そこで，教育現場での教育の経験がない場合は，「研究活動」を通した「学生への指導」でどんなことを考え，教育してきたのかを書くことで，その組織が目指す教育と何か共通することが無いかを探ってみることになる．

本校の AP 作成 WS では，3 日間の TP 作成の経験がある方が AP 作成をおこなうが，SAP と GSAP 作成の方には 3 日間の TP 作成の経験がなく，制約された時間内で作成する必要がある．そのため，教育・研究・サービス・統合の各項目の作成の順番が鍵となる．

AP あるいは SAP は，自分の教育観と研究観を再確認し，サービス（校務や社会貢献）と統合しながら，公募する大学等が掲げる教育像との関連を模索することになる．

GSAP は，大学院生が作成することから，教育やサービスよりは比較的記入しやすい研究の観点から考えていくことになる．自身の研究内容を振り返り，公募する専門分野とのマッチングを探ることになる．これに対して教育の観点は教育経験が全くないか，浅い経験しかないことが多く，自身のこれまでの経験から，理想の教員像を探っていくことになる．また社会貢献の経験も少ないことが多く，自分の専門領域からどのように社会貢献をしていくかを記載することになる．

メンティーはメンターと相談しながら作成方針を決定していくが，その過程でメンティーの過去の経験から現在に繋がっている価値観に触れることになる．自分の大事にしている価値観が浮き彫りになり，SAP や GSAP の核（コア）が出来上がっていく．

一般的に公募書類の場合，自身のみの作成で終わることが多いが，AP 作成 WS で作成する場合は，3 日間の WS で第三者であるメンターやスーパーバイザーの視点から助言をもらえるため，より洗練された文書になると感じている．また WS 参加時に公募利用が目的とわかった場合は，運営側で担当メンターを配慮し，外部に対しても客観性をもたせている．

このように AP は公募書類としての役割を十分に果たすことができることを再確認できた．

６．おわりに

本校が 2023 年度に 2 回開催した AP 作成 WS について報告した．対面 WS とオンライン WS のメリット・デメリットを踏まえつつ，ハイブリッドの WS が開催できた．特にオンライン WS では画面上の制約があるために，メンターからメンティーへの声掛けを対面 WS の時よりもきめ細かくするように心掛けた．また公募書類としての AP の役割は非常に重要な位置付けになることが再認識できた．本校では今年度も 9 月 10～12 日と 12 月 25～27 日に，AP 作成 WS を開催する予定である．

謝辞

本研究は JSPS 科研費 23K25674, 24K06117 の助成を受けたものです．

また，拙著に寄稿いただいた久野章仁氏（大阪公立大学高専），鬼頭秀行氏（大阪公立大学高専），三苫好治氏（中央大学），河底秀幸氏（東京都立大学）に心より感謝いたします．

参考文献

[1] ピーター・セルディン，J. エリザベス・ミラー著，大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳，アカデミック・ポートフォリオ，玉川大学出版部(2009)．

[2] 金田忠裕ほか：日本初単一教育機関内アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して，大阪府立大学高専研究紀要，第 46 巻，pp. 71-76(2012)．

[3] 北野健一ほか：日本初ティーチング・ポートフォリオ作成オンラインワークショップを開催して，大阪府立大学高専研究紀要，第 55 巻，pp. 31-38(2022)．

[4] 北野健一ほか：2021 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告，大阪公立大学高専研究紀要，第 56 巻，pp. 11-16(2023)．

[5] 北野健一ほか：2022 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告大阪公立大学工業高等専門学校　研究紀要，第 57 巻，pp. 35-42(2024)．

[6] 栗田佳代子ほか：「大学教員のポートフォリオのこれから」，第 19 回京都大学教育研究フォーラム(2013)

[7] 吉田塁，栗田佳代子：構造化アカデミック・ポートフォリオの開発，日本教育工学会研究報告集，14(4)，pp. 15-21(2014)．